

津保名以書  
八



賢女貞女判目錄

- 一 じらさぬ乃衣の事 付 賢詩歌評判義瀧の書
- 一 阿一のうゝの事 付 同
- 一 ちるちるけの事 付 同
- 一 丁急はむ花の書 付 同

賢女貞女の列

昔の世 源氏物語中

一 じらうれのうくとすえしは按察大納言の娘を  
 父母にもやくをくれたまひ母をこれ思ふまゝにや  
 おれがまゝ母をのぶりとてはためお細言とすしおとま  
 一 此のうのひりありていとよふ屋かひしそま  
 けつ源氏れまもくはやしけひしけくも内れひ  
 ありのうにむらしけひしむむむりれ世中子孫と  
 すしはは系れまの世叔父とくうむまの世子なりを  
 まはまはうむまもやまひしけけふすありてうれ  
 平まけ傍れまには思のまりありもけりけひし  
 かり娘まもは九つづりにはとてせけひしは

いとおぼしてすぢれ子と懸——とぞれのうづま  
 にいぢりあそび終ふと源氏れま痛のがれり—  
 ひま終ぐれうしれを見終つひとそまいど終ひ—  
 席にぬらんトそあしと終とゆりて終りら系に  
 うり終ひいと念此よの終ひもりてにむぢとあれや  
 ちくむくうし終るり終れどうせ終ひとくあ  
 終ぐち懸——していもそのひもにうらひ懸  
 此終の終もしなぞらふべいもいもくらく  
 —くおりませ——となりゆらにこれと終る  
 といかうあつたも人からあそく志げにちも  
 こと良くあがり——源氏れまあう——か  
 なさいまとい終びあつれきもゆらむらり——

どもあうらりれぬ氣矢とかり——まさびらう人いぬ  
 のりげられのうが道を大切にあげ——して終回  
 れへそえおほつれくおり——か（後）らせ終ふと  
 こいねことになぐさみ終るもさく懸——とせ終ふ  
 又さう人のあう——くてと——れつる道を志さひる道  
 やとれよめならとけまい志づれ別を志さひ終ふや  
 うされどなま終らうし終れもんとし終——くた  
 けしうしうずくのかさひ終る志のびあう——う場  
 終ふ時と終れあうおらうして人とくり出——とそ  
 たまふ源氏のまも愛れよなまといどく——くと終  
 —とこらうあうまうあふらうやとくて懸びとよ  
 ひともかうし終ひとそい出と終ひあつひいめ終の

こづゝひ又かゝるくおいにぞにかゝるけしやづり  
好みにいゝくされて辨言たぐみなり人なれども案  
のまといえこそあさむり流す悪ひあゆむ流す  
とてい先は思のうへよつげていぬいひゆつされてあま  
原氏にたれ浦ありぞれ流すともこづゝおろく  
なうりーとてい思れとにひくは竹枝をおぼや  
女も是とれいひ流すの嬰見れ母とそつひ  
何ぞりすつとてい思れとにひくは流すれ思すは  
いもとらるる思とて女もにいとくくしづりす  
流す次くれ流すいひ流すのわ物そにわつとつ  
流すい系れと賢るるくろり流すりんやわ物そ  
くたるるーとてい流すれ思すれは流すりんやわ物

乃上流しけきとともろりけは原氏物流にこりけ  
まハ肝要をとらるる

賛

崎嶇富士過山高 温又和平乃聖豪

窈窕紫君保淑德 嗚呼万古則貞道

和歌

時——ぬふるみさかもあうり  
まらのこむりもゆたよめく  
りいづるみはこ流もあうり  
こむりさ地のゆりあうり

評

吾期にもしり賢美貞列乃婦女多一と

ことごとく及わりけまふおわく御すべしとある一貞か  
ににおりて越より賢女と云べし是より後貞女と  
とすべしといはまはくはなり憐れ船三十七歳よりして  
終一終ふ天も命と云ふ一命と云ふ其不幸極命  
終一今史人これと行じ

論

或同くは志上に志願どくともあるといへども賢女は  
名と稱するは事ハ如何 玄松栢れおられて一は  
まばくハ後ふれつるもかり賢女とされば三とせれむ  
より寝にふれきあむむもなりといはれどるにおもす  
それ人にいせられてはげれ終日何れおらするやどく  
あつハ貞女列女風なりをこらたててこそるるといふ

名れど行ともく徳も威儀ありと令せば色とも其威  
におそれ難とれどもをばとひらするに愛とよぶ  
又いば徳も一と賢女と云べしけまはせられて仁  
愛から徳授ハ改テれるに原氏のより女房おほく  
あづけといはれしと同女の中より一はに嫉妬お  
つて中あつるべしといはれまにさのやうな子れ母よ  
よがごとく一原氏もまといはれまの仁愛に嫉妬なく  
サ御ころおとれくお智らるとありて皆あづけ冷  
ふたりと一又唯一の後れ女と云ふは素乃まはれ女と  
しそとぞく終ふや我美れ子のどし それ終に子  
かたりのまはれと云ふハ我美の親子れと云ふとあら  
終にまはれまはれと云ふ一と云ふのより去るには素乃

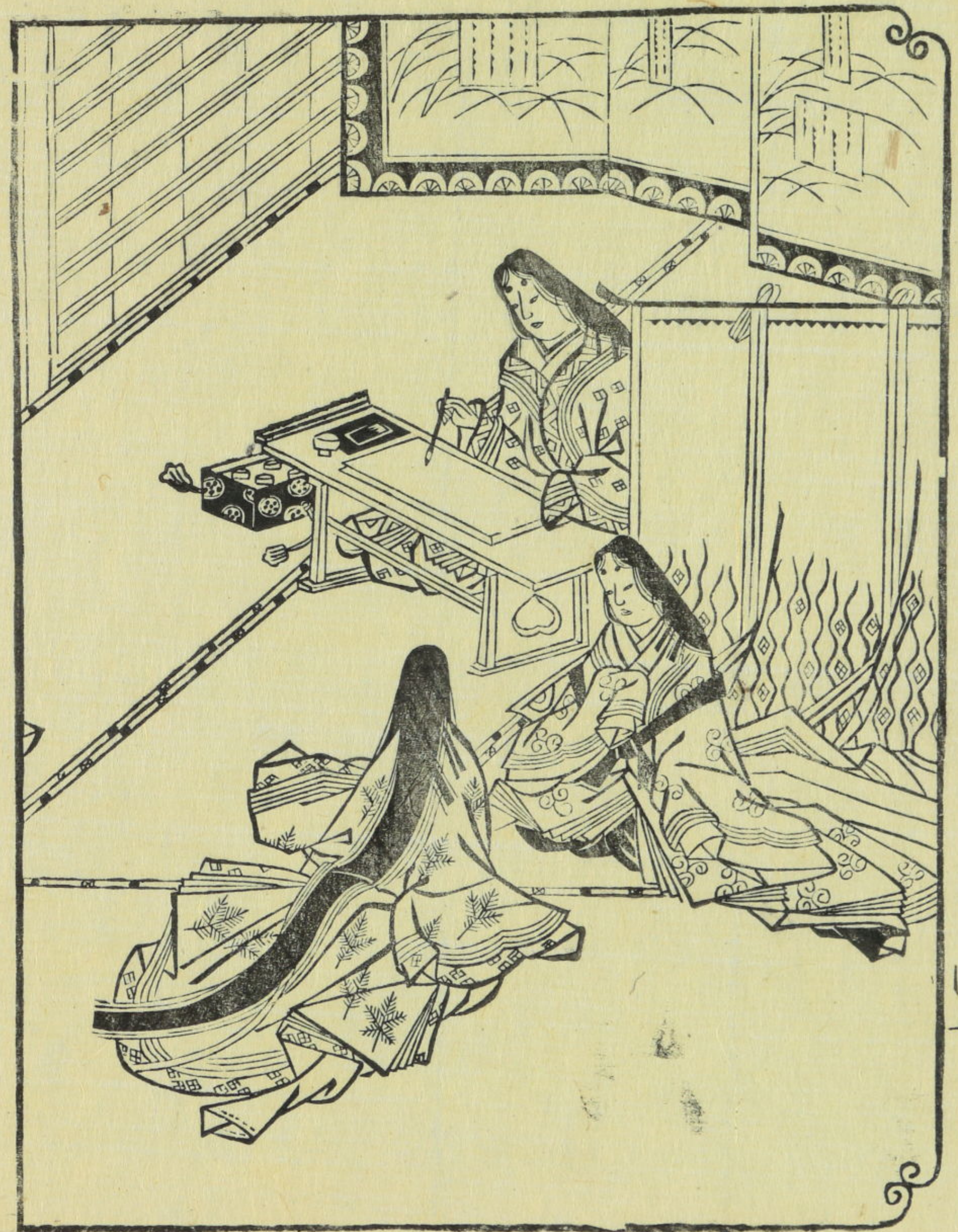
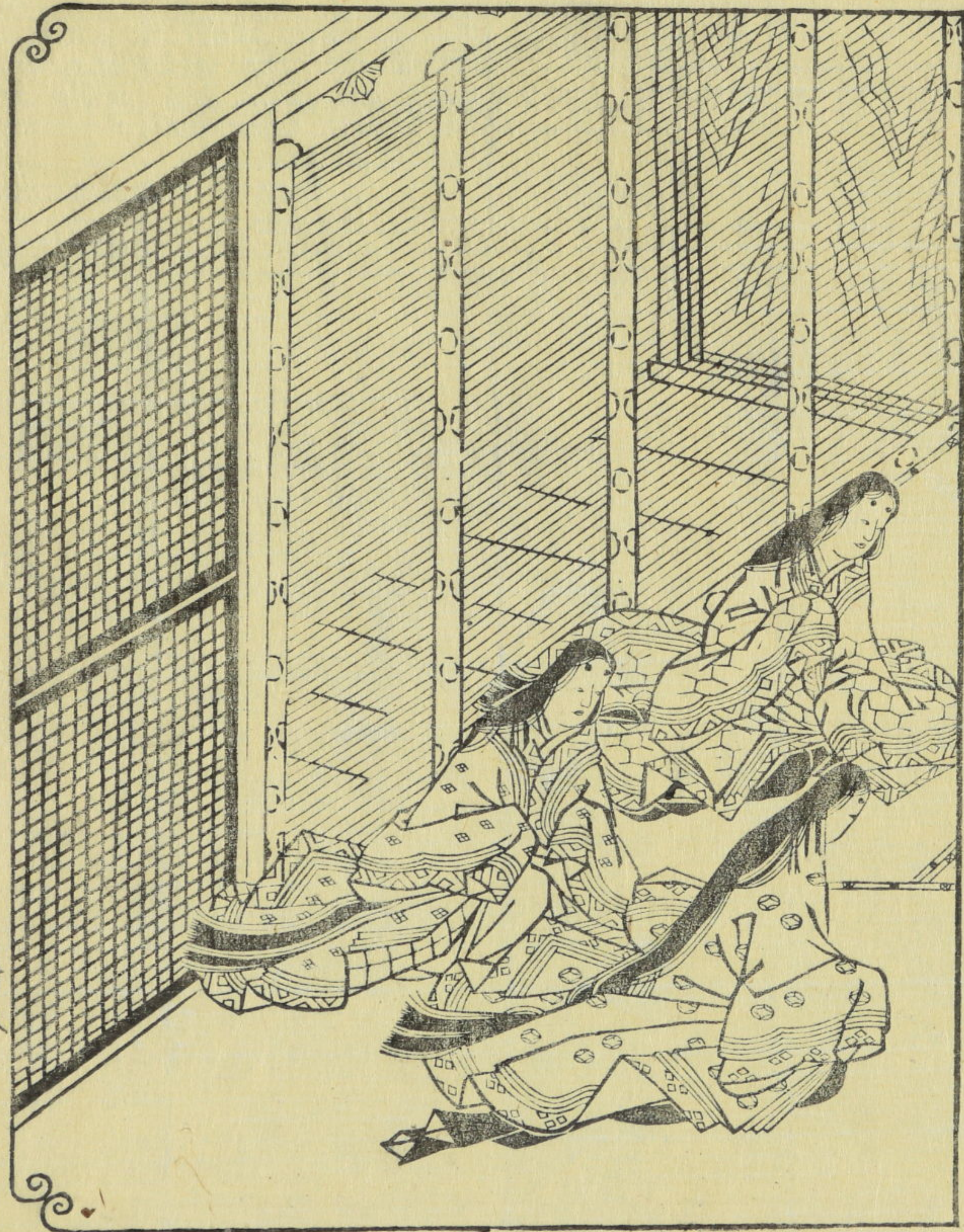
実かかー娘をの継母にたのむるや実母にも捨て  
たり成人のほも実母よりいそぎふりたり  
娘をのむるも終つて実母に勝つたれのもるは原  
氏を寛れた六条院いでとく原氏の毒しとぐり  
けり終つて終つていんぐんぐにさそひくはに  
儚がうらもとあつばらぐおとまりしも六条院へ  
うつり終ひくつらばたえよしとぞれぐも地よ  
なくはつたれーやばあれよといふうたか人として  
よの娘かーら女中ごとくくく徳共をに和  
して儚が中まぐ皆おーたりとらんをひら  
よとて賢れ賢女うら徳共とてとんづるとや  
同じるれば賢女に目とあつらうすゆたまれば

か賢女列女に心志の賢るれどもいそぎ徳賢るるはた  
能まよりして其人中れ剛健とてーそれいそぎ  
とてとての押していひより恐びとていそぎもえり貞列の  
女それか或の白女をがー或の計器ををらうー其能とら  
も又の女まにまてられ操甚目ををらうす行はり  
賢女の常にうらうすたつて人の面士れ山れ陰なるも地  
にハ志のすおより徳共とく威養とけ色バ父ありとい  
へどもなづくおとろくおとろくして礼金ほまといひも  
やうたつては集れまの継子といひまぐり女房れんぬり  
どもそれだにわひたまはづうれりもるははまれとを  
あつてははまぐりあそびお給とくれたまふも今  
日れらるるは装束にあそびでれにたきく

つにありて日れららばらちびあり東にまはる  
 て体はれまらるにたましくまひがまらるありさ  
 由繪にうたてむらぬおどくし給ふ時日もまきかてこれ  
 ともつてもくれんまきせむと志給りありあらはれ  
 がはつとむらるるまきにうたてさうらにあらん  
 へすむらうくくくれ給ひはこざりありつててま  
 ばさる由しとむらるめどけんよはにまらむかていそと  
 い(ま)らひ給てさうらあすいそにうたたまかたれ  
 たまふ其とれは皆なごさみやびりおひしてさ給も  
 けらむらとと係氏次まより由系ありて繪合れ付より  
 お給ふをましくえられ三年れ一日一東もけす  
 東れ日記一日に繪二とぬづくこひれ日づづつけく人れ

ふとまらさあつと思ぶくもわそび給ふやうとまこれ  
 日記をけらりまはれ世もれ心はありやまらなかく  
 まりり給ふと何とまなくありし給まらりはまき日記  
 ちりたりとくれんれつんまらりぬまららうくお給  
 一ちすまら其ののにはほらすまにます人あらる  
 崩賢女れ速容用とまらるべー感らるにらまらりありま  
 まくいへむらとらふなりさて其繪とらりもまらまらつ  
 まら係氏由系一給ひてまらまらに出し給うん日記  
 いんづらりおのこまらななまらまらけらうくお給  
 ちせむられ席と待たまらにけらしに裏まら梅つが  
 散つたれ繪合あり係氏より秋好中まのこまら給  
 くれまらつてむららけら乃まらにまららだんまら





これらかきしとびし今れ終どもとえしひ終ふられおの  
きば共おどろく何ともく原氏にも見せたり終ふ  
共いししとつがねしよりいいでけいいでさす  
はらうしきし終ふの賢れ賢女の家連書さるる共  
のららし終ふの賢れ人よりし終ふの賢れ終  
親にあり終ひてもうらげさかり小兒れ人おあすや  
くにさぬとれ文のちれどもさす文にありて色  
くあともら終ふをあらひる小兒成人なら必し人になり  
りのより恥の恥びる心あまじかり名明連より小兒の  
六つせられはらうおあすかしくかきしげさるるの賢れと  
ましよりしして成人のら何のやいもさぬのなり  
彼恥ふる小兒とんと別終時についで教ぜし一賢れ

揚もがしこれにさる小兒とおえしして終るる  
しは案の上くゆしと九られは年花けなといぬといさ  
さらはれしししとては終るるをかされといふし  
又系しして原氏は案れらとえれしと見えし終るる時  
終るるとすあまじかりとて終るるに終るる時よりさる  
けしと終るるしとてしとて原氏終るるにいらたす  
非あすしとてす油と終るる終るるといふとて  
しとてまきとてのまよしとてとてはあはらるる  
あふ共かうけ終るる何ともく果しして成人れ終る  
女なりとて人の赤子れんと見えたりとゆとたりと  
だもこれとちれらしとては案の上のいれらるるありさゆくり  
くはせり又だあり人情し通連せらるる友女といふべし

賢女れ村とくつべー平生に飛て愛あつべしやうまーと  
うば様おばさまの目をぢぢらうりうりふとささーちんじやうとら何と  
うぢやおぢさまとくいと愛とままぶとより又平生へいせいにまうぢぢ  
ちんちんりたりぢぢにーく異風いふうかまこり愛するのけり  
同感どうかん儀おりれとふらたを奏そうれともと痛あわりのーにい  
るれが原氏はらぢあつとよりぢぢや 云世よせ活くわくにも慣な食じきか  
めいあぢぢりやぢぢーといつりまよんぢぢぢぢーく己おのれ  
然しかるるといぢぢい奏そうと下くだ一いつ神かみ人ひと情なさけなり奏そうとハと痛  
しくおもくーといつどもぢぢとられりぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
憊うきぢぢぢぢは結むす梅うめにそぢぢりけぢぢ離はなとーすぢぢぢぢ  
うーとぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

おとつりされぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
へーとと原氏はらぢれぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
奏そう上じやうには原氏はらぢとて地ぢ法ぽうがくれをあぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
まの女おんなーく良よい愛あい愛あい致ちみれぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
にあぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
てぢぢー其その上じやうにぢぢらけぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
けりぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
はにあぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
原氏はらぢも好この又またと免まなはぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
くぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

幽約の稱すべし未だぬくべしども物終てん玉に眼  
さし後まんと用を徹細ゆべしめたは教室末摺記  
又これなうし

同原氏物語ハ作り物終よしと原氏はと云人もま  
といり志くくバ音子徹入を差するや 云物終ハ  
ゆり物より原氏は志を承れ名もまると云ふと云名付  
たまごこれもゆり物よりされど原氏と名付は系と  
名付とも承れ人も物終ありと知べしと名付とら  
りとされありかろがゆに名とるより是と聖人の  
道とくハ假説といひ教氏の方便とに莊老又一家  
て遇言といひ又原氏物終ハ比興といひ作より是原氏一説  
の秘変傳更なりといひり亦人保切して傳と書ん

といくもえんやあうらバ予が論物終人々と稱すは系上  
いひ其人の事とせん何ぞ益なうしんや明はた教室  
末摺記又これなうし

一 明はたとせしきハ清原守入道のいしとあそそ母ハ延喜の  
帝のいりふといひりけい人の父ハ延喜とて上を承り  
しとる入るも延喜の女おしとて大納言までハ終らう  
べれ人のせれひりあそそ教のまらりむつりくおひ  
やんごとなれらういしとて清原守後藏より入て  
引下り入道と居り一回れも後されハ家内は  
くしれもなうしとてむしとてしとてしとてしとて  
くれより更はたのいしとてしとてしとてしとてしとて  
承んてゆふ中にまぢらひてもえよりれ上らうにも

さりてあけをけりくくすたたくは思れ美苑教里とト  
 ち氏志とごらう一れめのよおもりまう一人なりはまば  
 父入返もたうく乃人に見せんことあうう一くおも  
 ひらるるこころより涙のすいひききもけひ子孫  
 成れ志とまらけそそまうくまうせ一なり明  
 乙の四舎にまじととどもひらびらううなて琵琶を  
 ど上ひうそやう一そちそびにんを入系にまうりて人  
 におとらびくさふさみお一終いづもは思れ志のよ  
 こと知といともいりつさめ名に其賢かうとまりて我  
 くれ娘志と思の志にゆらんすすくあう地一なり  
 思れ志と明るれよらう一く貞女なるうとたたまを  
 けたてじつま一く修いられ一なりこれともう源氏物

浩をえくくんと用べ一

賛

月清明石中秋夜 山脊松高琴瑟掄

波調琵琶女亦妙 海嶽神妣産伊球

明石上得琵琶妙源氏能琴干時秋有明石月見殿八月十五

夜源氏彈琴入道彈華後聞明石上琵琶故詩中如此

和歌

琴乃善もあまらうのそと思れ法も

いほさそてーひま乃ううう後

海士のまもまねうしあう一代と流

よびつうううん思乃むんまら

入るれを形を思のを形といへむたうり

評

父を尊むるは始と猶もたり母を尊ぶるとは上焉  
多れば其の風よるより分はまにや尊むるは  
新く見るといへども塵埃の類にぞとて一  
塵とてこれにまじりて上焉にぞとて貞女と  
いふべし

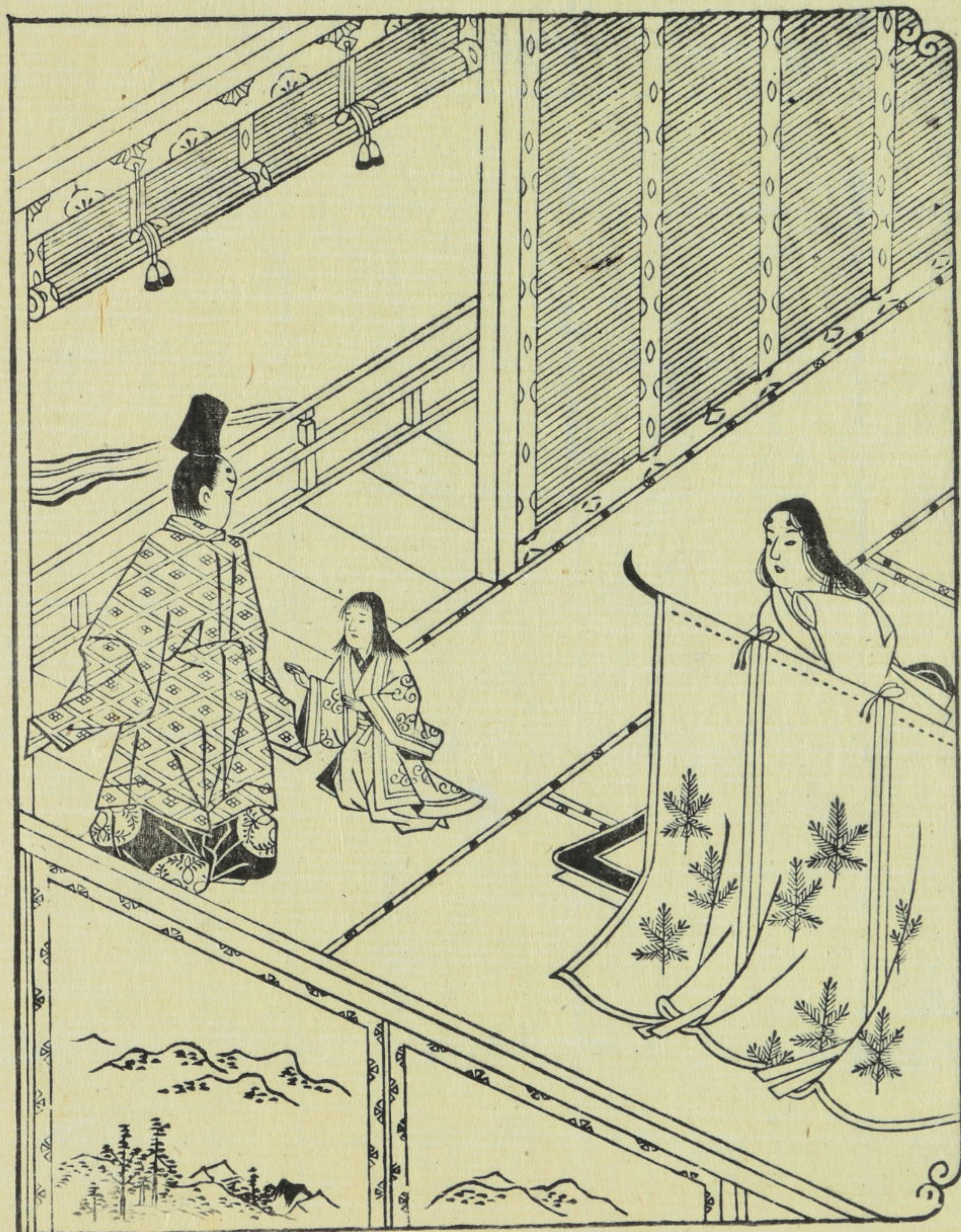
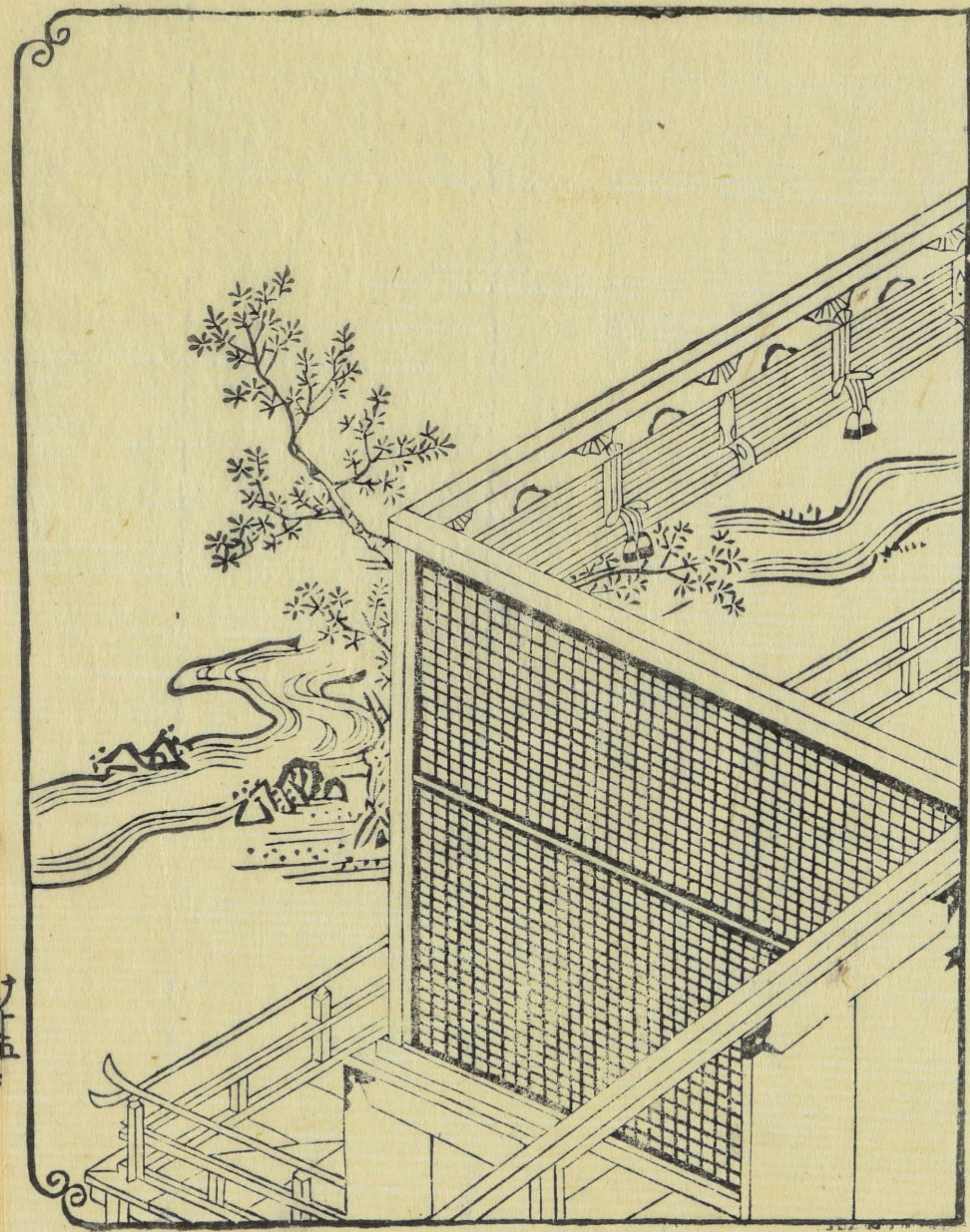
論

同明石上強に貞女を尊ぶるを尊ぶるは此類に  
孫を尊ぶるは尊ぶるは何ぞとて尊ぶるは  
玄不相應といはれども 玄上より尊ぶるは  
くもくもといふはふもくもにあらざるや  
まかりいへばとていふを尊ぶるは尊ぶるの下に

しるべきこととて尊ぶるは尊ぶるは此類に  
いふは武士の妻とて尊ぶるは尊ぶるは  
けしうかろくもといふは尊ぶるは尊ぶるは  
をよむとていふは尊ぶるは尊ぶるは  
家々妻女を尊ぶるは尊ぶるは尊ぶるは  
らげらるるにあらざるは尊ぶるは尊ぶるは  
らに金玉を尊ぶるは尊ぶるは尊ぶるは  
をいひ別とて尊ぶるは尊ぶるは尊ぶるは  
おめりしるは尊ぶるは尊ぶるは尊ぶるは  
古今は序に物のいふは尊ぶるは尊ぶるは  
比其さぬいふは尊ぶるは尊ぶるは尊ぶるは  
とていふは尊ぶるは尊ぶるは尊ぶるは

我ら燕は隣がこれに於て驚れしもの極代家に尋乃  
し我が意とわが頼なり隣に引ひしとは中より下  
につけりめされば身と下とさうとて子孫の松はきり  
りめめとさうふとさうとてかたひひらげり  
やんりのあり麻本郷のいしとさうとてさうとていさり  
昔の姿はけり地りのありふの賢なると云ふ  
に文と此後太妃のうら地りに入らとめされうか  
たつたに揚貴妃は美人うつらぬ姿とありとよ  
ともさうとてさうとてめ名のよれはれを垢れ襟あつて  
けふてひらげり地りふうらびうら姿とて心懐にく  
もさうひやううううううううううううううううう  
面々所にあまり羅凌刃に肉とひしれがうう

はよりうらるる今をそのおぼえさうとてさうとて人とならば  
ていんさうとてさうとて武士なりとらうらげらうら麻本郷  
涙みのつれとておぼえさうとてさうとてさうとてさうとて  
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて  
めが結梅なる姿とありともさうとてさうとてさうとて  
松凡の姿にさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて  
下れさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて  
れ出とかがばんともさうとてさうとてさうとてさうとて  
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて  
せにうらうらさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて  
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて  
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて  
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて





上臈（上臈）一々（一々）れ（れ）ば（ば）よく（よく）似（似）合（合）たら（たら）なり（なり）なら（なら）かな（かな）ら（ら）ハ（ハ）わ（わ）り  
 づ（づ）け（け）り（り）其（其）ま（ま）ど（ど）ね（ね）く（く）と（と）驚（驚）し（し）て（て）去（去）る（る）せん（せん）と  
 う（う）け（け）り（り）も（も）何（何）れ（れ）な（な）ら（ら）な（な）ら（ら）と（と）ま（ま）る（る）も（も）い（い）ち（ち）ず（ず）ら（ら）そ（そ）ち（ち）に（に）い（い）い（い）づ（づ）る（る）を（を）業（業）わ（わ）い（い）ら（ら）卒（卒）せ（せ）れ（れ）ば（ば）  
 ま（ま）て（て）も（も）あ（あ）ら（ら）む（む）も（も）止（止）ま（ま）人（人）も（も）た（た）れ（れ）ぬ（ぬ）と（と）あり  
 我（我）後（後）の（の）娘（娘）も（も）は（は）な（な）れ（れ）る（る）に（に）き（き）く（く）ま（ま）つ（つ）る（る）も（も）天（天）も（も）地（地）も（も）  
 と（と）む（む）り（り）あ（あ）ら（ら）れ（れ）を（を）女（女）も（も）う（う）む（む）ら（ら）を（を）や（や）ら（ら）む（む）ら（ら）が（が）  
 う（う）ん（ん）に（に）集（集）れ（れ）志（志）の（の）覺（覺）た（た）ら（ら）と（と）知（知）く（く）娘（娘）子（子）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）  
 む（む）い（い）そ（そ）の（の）終（終）り（り）の（の）母（母）も（も）う（う）む（む）ら（ら）に（に）い（い）は（は）娘（娘）も（も）  
 う（う）ら（ら）む（む）ら（ら）の（の）中（中）に（に）ま（ま）る（る）も（も）そ（そ）の（の）終（終）り（り）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）母（母）  
 う（う）ら（ら）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）  
 う（う）ら（ら）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）  
 う（う）ら（ら）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）

成人（成人）乃（乃）ち（ち）右（右）に（に）う（う）ら（ら）給（給）ふ（ふ）卒（卒）女（女）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）母（母）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）  
 権（権）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）  
 紫（紫）衣（衣）に（に）ゆ（ゆ）づ（づ）り（り）て（て）我（我）い（い）ち（ち）の（の）文（文）衣（衣）の（の）む（む）し（し）も（も）あ（あ）る（る）れ（れ）と（と）  
 卑（卑）下（下）し（し）ら（ら）む（む）も（も）負（負）か（か）り（り）文（文）衣（衣）あり（あり）を（を）徳（徳）言（言）大（大）な（な）り（り）と（と）  
 べ（べ）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）  
 又（又）源（源）氏（氏）に（に）あ（あ）り（り）う（う）ら（ら）む（む）心（心）不（不）お（お）お（お）ぬ（ぬ）れ（れ）や（や）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）  
 父（父）の（の）心（心）も（も）父（父）の（の）心（心）も（も）父（父）の（の）心（心）も（も）父（父）の（の）心（心）も（も）父（父）の（の）心（心）も（も）  
 て（て）卒（卒）人（人）も（も）あ（あ）ら（ら）む（む）心（心）不（不）お（お）お（お）ぬ（ぬ）れ（れ）や（や）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）  
 意（意）に（に）お（お）り（り）ま（ま）と（と）父（父）乃（乃）余（余）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）  
 同（同）原（原）氏（氏）の（の）心（心）も（も）父（父）乃（乃）余（余）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）に（に）ま（ま）つ（つ）ま（ま）る（る）  
 妹（妹）に（に）あ（あ）ら（ら）む（む）心（心）不（不）お（お）お（お）ぬ（ぬ）れ（れ）や（や）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）  
 和（和）人（人）も（も）あ（あ）ら（ら）む（む）心（心）不（不）お（お）お（お）ぬ（ぬ）れ（れ）や（や）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）  
 和（和）人（人）も（も）あ（あ）ら（ら）む（む）心（心）不（不）お（お）お（お）ぬ（ぬ）れ（れ）や（や）う（う）む（む）ら（ら）の（の）心（心）も（も）

老の儼然として今福ぶればおにわくす又好らるの  
と癖として原氏の仁恵なる人なり悪く人々を  
おろくせんとし不仁に利欲するや亦もなつよしていは  
原氏の厚敷とゆへりのわきまをこえてくつりこそ身  
質素なりて矯りしはま退別の時と武友と守  
てるとひくせ給ふ好せ好えらるす徳を以てした人  
に不仁なるなる人なり好らるにわくすとも原氏の  
好色なる人なりは亦くともわたり唯も衆に徳を  
事なす衆乃上に射してはおれ人くは皆妻よはて  
せども後をれあやひなきとひよあらず其時は  
かみくろ人の女妻ふるもくもくは人乃おひ人  
に親とて眉目としてく何もその時の風俗としてく

今福ぶるす今れ時すく入道もまいつくも明も  
同くもゆへ原氏もも今この世に世に世に今この世  
まくも父も好むすく好人になすべと氣象は  
其時代よはいまもなるなりくくも人々も  
の心とあらざりなり延きれ聖帝といつても原  
氏ももと見えたりやまはるく異端もいつくも  
同矣敏端のどれはめも賢女にあらずや志るに  
貞女といつるは何ぞや 孟子弟にいつく氷と水  
精とのごとくしてらばくもあはれ光輝温く陰と  
るの唯もぬぐれば其徳い素素にどくも  
ちりりたるくは白梅と山桜のどくも白ひわりて  
るくはれとくも花はぶくもれあるれらるる

うす

花散里と申す一はなを散るるのやうなりしうごも  
りのやうふしと女しく嫉妬たたまさるれ源氏を  
出てもなれくおひてまらまけもさうあまら  
しれぬきもさく境よの我のみづらの容のあまら  
ようぬがうらうらとくおほきに我のみづらに  
源氏にあわさくつるに似合しうぬまもあまら  
りりて源氏花散里のうらとゆりたまふ時ハ源氏ハ  
かこたなくおぼせどもつがなとゆりたまへ我ハハ帳  
とるごさくやまみつとさくこれちがりづりま  
み抱づりのやうとてお糸院におりまうなづら  
まゆれむつま一はなを散るるもあまらしうぬま  
夕霧

の丈をまきひくいとまごころをうらりてほそひ  
のいと一はなを散るるもあまらしうぬま

賛

春往也 徹花散郷 馨芳 蕙橋 良婦 章  
子規不怨過三轉 莊驛童聞言嘆當

物語作者花散里之容也 喻于蕙橋干時 夏五月源氏入  
花散里之室 月澄子規啼有和歌故詩中如此

和歌

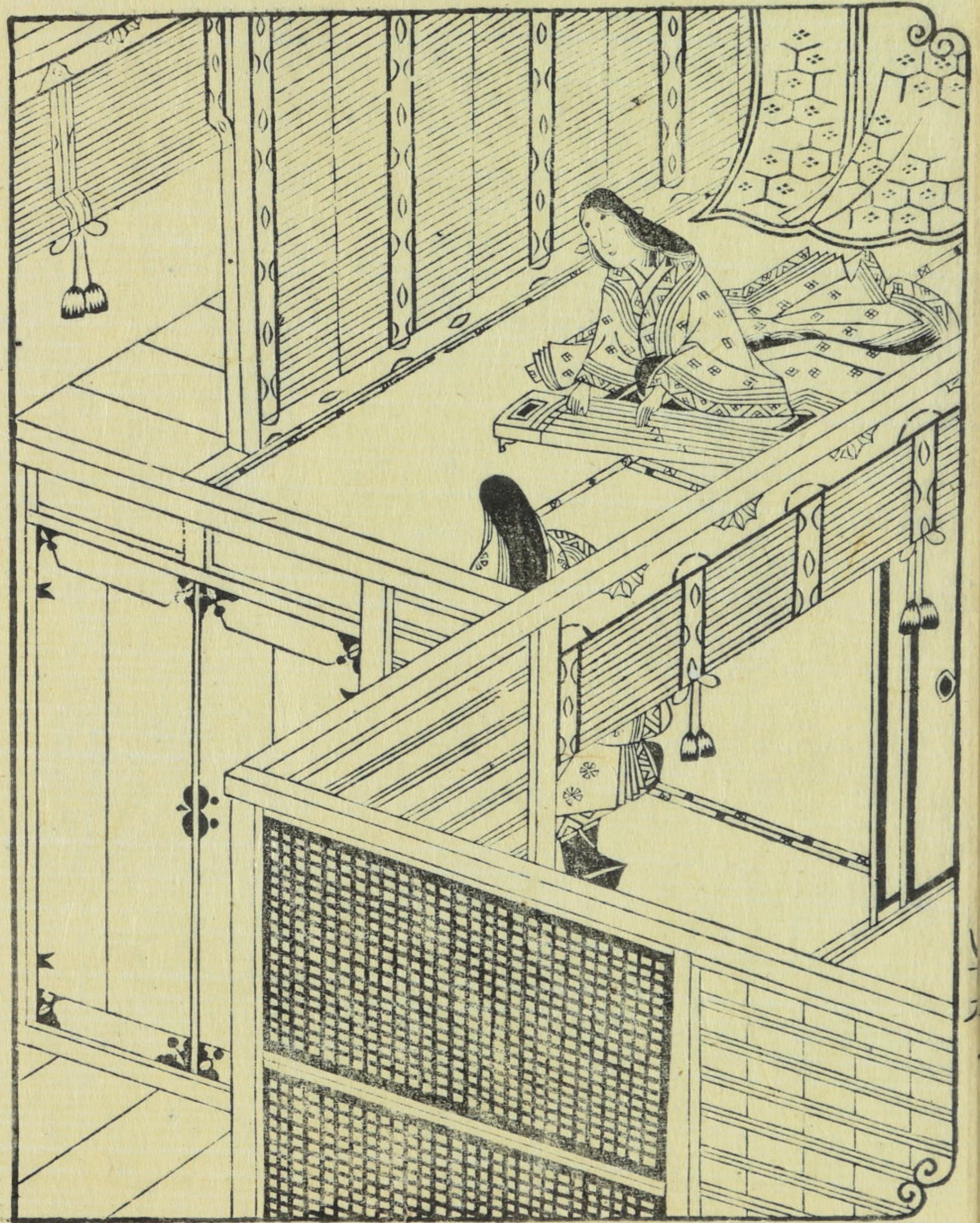
花らりくいとほかなふしともきくらたふら  
春往也一はなを散るるもあまらしうぬま  
夏五月源氏入花散里之室 月澄子規啼有和歌故詩中如此

女名華むれもまふり源氏まづの給よ

評

けあわよりいふらぬわらさるれども人ながらあまき  
女々れは源氏もまふりまづの給よは帯本れおほご  
めに左ふみづのいふまふりまづの給よは月かた  
人乃よりいふにまふりまづの給よは月かた  
とらちまふりまづの給よは月かた  
わられまふりまづの給よは月かた  
まづの給よは月かた  
まづの給よは月かた  
まづの給よは月かた

して久しう見ざりしるはうつくかなりたまひ  
きりしと源氏もまひ給ふまふりまづの給よは月かた  
見たりまふりまづの給よは月かた  
退れつらまふりまづの給よは月かた  
給ふまづの給よは月かた  
ひあまままのいふまふりまづの給よは月かた  
或ハ嫉妬つて恨まふりまづの給よは月かた  
けとまづの給よは月かた  
まづの給よは月かた  
たまふりまづの給よは月かた  
のまづの給よは月かた  
系に作のまづの給よは月かた



事ごとくさうなつて世尊のやうにおりひたまひ  
源氏ゆゑのくらもまよしの世をさくひとくらむる  
ゆるまへ一果とねぬ中でのぞく一さくちの天分  
知りくると人ならしむるはうほまほくも見すくら  
まほひの心なつてうつりつひゆふにぬらうとつた  
けきれねたのきとひの若女とりて一貞女にお  
らぶるわりのおまよふくらふり列女よまよふら  
アとおうむげつらつるあき

一末接見とまよく一常陸れえの非おまり愈女ありて  
美く乃とどにのりおま一舞れされあく本の  
美ひつとつきさうやうに額とれく貞女がすれ  
きりつ只舞のおづらつらつり命婦とつる女に

ところらさく源氏かよひ結ぶはきどと源氏仁ま  
まろくゆへにわさるるまでハ誰かかくとらう一人と  
がんじとてさく結はずこれ源氏抱枕の愛するよ  
これねえのまろく一なつり今れねえの人とさく結ぶ  
らんや又まにまへくおろしてよれ女婦ら一結  
みさくれなつらひもさうらばはらけち女婦ら一結  
結ぶさくまてさうらば現今なまら一結ぶらま  
らたまにけきおまら一結つらけけけせくらな  
たれどととねくまらり教ゆる源かけまばな  
らひさうさうねりらつらつれねた女婦ら一結ゆふ  
んどてにおろくハ女ら一結つらけけけせくらな

賛

紅華在鼻醜慈唇 德晶表裏光明諱  
惜也野夫進玉石 哀怡容色過書真

源氏秋云

かろくし地色となすしに何よこの  
す急はむ心死を神よりうきけし

末摘花曰紅花因之名此君鼻之赤如紅華也予  
詩中紅華喻形醜光明此君之操也玉石與容色  
書真皆指物語而歎不知入源氏之本意哉

和歌

うつくしれいらも見えにうつくしれなるの  
す急はむ心死を神よりうきけし  
春乃中一人のうきもどくうき

久はらんあつたものとあせし

二首戒好色

評

夫熟女にも好色淫私するありとぞれりありとぞ  
ひわしけもばんらいやしとありけまはとぞれり  
久はらんあつたものとあせし女れ情を  
い富貴を友とせむは世の知とぞむ人の富貴を  
し我れとぞぐりられ貧にも居しとぞれり源氏  
に三の位指の回し縁長へ給ふ其美とぞんて  
唯のにお方崇徳へ下りしにいざかひりて我れ  
の仕者よせんとおひふりてはとぞれり  
しとぞれり







十六回

ころろ 遠くお宿ののりへくしれたらうとてきた  
 まはつれとあふくとも年々お宿を眺ましく人  
 からのいやうぬにやりてらよううすといふも  
 けりれどそれとてふりおのまもお宿ののり  
 ばかりおふかたうーそれバお宿のたもと色こも  
 は素れますお宿ひくひまへしやりおふかたうー  
 未摘ののりへくしれたらうとてきた  
 うらまけいぬくぬとてらうお宿を眺ましく人  
 氏を眺ましくぬとてらうお宿を眺ましく人  
 本ん情されバお宿にまはつれとあふくとも年々  
 お宿を眺ましくぬとてらうお宿を眺ましく人

け二十三

いふれもも時いままい人のうらさどがきり終る海  
一々まといわたりやまこまも源氏れ物成もさよ  
と上福なつもバ知るやれあまひかまらうく喜  
終ぬぐんあるべ一ちうらバ誰わりて未摘気成  
若とひまつげやらんや源氏系に居終ふとれま  
でいりり貧乞よあうり一ぶはむら難  
は源氏もおひ終ふまどりこり終款うて世に  
るつらふんやそれごとく女もまバワが思こり  
たるげよほも終ふまど交と必貧乞くれど  
まにとまらり  
或同者殿後のごく其勇わうくと主款わりの孝子  
の終まり交れぬふ貧乞なりといども屋と賣び御

度は貧乞よえげうの孝子もり一べ一何ぞ貞女とい  
ハざらや 云是皆氣質の美よあく明是れさ  
すべさ一其上にもい女婦 誰とまら一な  
形のハ皆野うてん女なりん理もまら一た  
れ人かりもまら貞女におうぶらわりの及女  
あり其終けやあかなけまら志づく列女  
とてはのまらまらら  
同源氏とらんくハ源人とおらひん終らあるに  
今美殿の評と中てけま乃善なる事と志まら  
に行ぞ式ハ其善をまらばら只の中一むらねま  
ばや 云善をまらばらよハあらず一とまら  
ハ皆善をまらりんく一に好まら

活わりく書れ物事をあらざるゆへは甚だしく  
 色こそ幾と碗よのこころゆへは其書と人出す  
 故に作志の地よはわらば後まれ罪なり侍  
 二代主と抱て女是と仰し一農まも君まは  
 罪とありく意主に通じももを人ふとひ  
 中みれ玉みぐれもふかりといひくおのめま  
 ちりす源氏物語もまた多るり又を能く書い  
 て人ぞらいやれとわらわらもふありわら  
 せれの操あもももくくゆももはるん  
 ことすらふかたはあらずとあつて一かづ  
 びりも今もあるぞ変はゆり今もくく大  
 くゆゆんもにまらんと人文武支能く

く月花にも野りらわらくおもひ事には  
 同じまれ悪女乃能けしらすいと地はあらずや  
 玄わくのどくの悪女といどもゆゆゆゆゆ  
 の源氏乃好女といどもゆゆゆゆゆ  
 とらふとも弘徹殿の悪女乃能けしらす  
 せんや世の婦人乃の美とてこれ美とつら  
 甚北なれ戒にうけらるる一はははははは  
 ちわくくともゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 じやわといとも人あつてすべし妻とすべし又  
 好結くらうらぶゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 んゆゆらけて悪人うらむゆゆゆゆゆゆゆ  
 とせん古今人此の霊もあるぞ

いふ源氏物語乃ららんしゆのまはる極容と  
稱せむあまのこけりといふも果にいとまはる  
しんろく人好父のまはるす志はあまのまはる  
とけりなりし

